

## 中学校社会科地理的分野における農業・農村学習の新たな視点

林 琢 也\*

### 1. はじめに

本研究の目的は、中学校の社会科地理的分野において農業および農村をどのように取り扱うことが効果的であるか、その一例を示すことにある。

これまでの社会科教育において農業学習における問題点の一つとして、農作業の大変さ、農業所得の低さなどの部分が強調され、学習者に農業を3Kの代表とみなし(須藤1996)<sup>(1)</sup>、嫌厭傾向を強めてしまうことが指摘されてきた。また、小学校において、野外調査として農村を訪れても、教師の指導力次第では、子どもの興味を惹き付けるような説明がなされない、あるいは、農家の子弟にとっては既に当たり前のことであり、何ら新たな関心や驚きのない学習が繰り返されるといったことが身近な地域や産業(農業)学習への意欲を低下させたとの調査結果もみられる(篠原1992)<sup>(2)</sup>。こうした点を鑑みると、これまでの社会科における農業に関する学習において、農民の知恵や工夫、農山村のもつ環境保全機能、精神的な豊かさといった側面が十分に教育効果の高いものとして活用されてこなかったことが指摘できる。

たしかに、日本の農業は、高度経済成長期以降に兼業・離農化が進み、産業としての重要性が低下していった。それに伴い、生産活動の基盤となる農村のコミュニティの弱体化や地域アイデンティティの喪失が顕在化した。しかし、人間が生きていく上で、食物を通じて栄養を摂取することは不可欠である。そのためには、食料を安定的に確保するための生産活動は絶対的に必要なものである。

中学校の社会科において、農業や農村を取り扱う項目は多く、例えば、歴史的分野の学習のなかで、飢饉や年貢、一揆などといった事項には、農村や農民(百姓)に関する記述が登場する。また、公民的分野においても、発展途上国の農業・農村問題などが取り上げられている。このため、「農」に関する学習の問題点やそれによって与えられるイメージは必ずしも地理的分野のみで改善すべきものとはいえない。しかし、教科書内において産業や人々の生活に多くの紙面を割いている地理的分野では、より農業・農村に対する多様な見方や考え方を育成する「場」を確保することが求められよう。加えて、近年は、社会や人々の農業や農村に対する見方も変化しつつあり、時代に即した内容と取り扱いの方法を検討することが必要である<sup>(3)</sup>。

そこで、本稿では、農村に対する人々や社会の見方が転換しつつあることを整理し、それと関連付けて、中学校社会科地理的分野における効果的な農業・農村の取り扱い方法について検討する。なお、中学校を取り上げたのは、高等学校における地理は必修科目ではなく、履修率が低いため、中学校が学校教育における最後の地理学習となる生徒もかなりの数に上ることによる。

### 2. 農村観の転換—生産空間から消費空間へ—

従来、農村は、都市と対照される特殊な空間とみなされてきた。それは、低人口密度と粗放的土地利用、景観と密接に関係した集落・生活様式に特徴付けられていた(クラウト1983)<sup>(4)</sup>。しかし、1970年代以降、多くの先進国では、農

\* 筑波大学大学院生命環境科学研究科

村の経済活動の中心が農林業などの第一次産業部門にあると考えることが困難になった。それは、都市化の進行や、農外就業の増加、農村の工業化などに代表される。これらは農村地域の再編成を促し、伝統的な組織の形骸化、コミュニティの弱体化を加速させた。とくに1990年代以降、農村を新たな枠組みのなかで捉えようとする「農村性 (Rurality)」に関する概念的な議論が進展している (Hoggart 1990; 高橋 1998: 1999; 高橋・中川 2002)<sup>(5)</sup>。こうしたなかで登場したのが、「ポスト生産主義」という視点である (Ilbery and Bowler 1998)<sup>(6)</sup>。すなわち、これまでの生産主義の視点からでは、農村は食料生産の場であり、そこでは、生産性の向上が経済活動としての農業にとって重要な使命であったが、ポスト生産主義下では、生産活動に加え、生態系の保全や余暇活動、教育効果<sup>(7)</sup>などを兼ね備えた多面的機能を有した空間として農村を位置付け、評価しているのである。なかでも、農村は観光と結びつくことで、さらなる発展の可能性を有している (Hall and Page 2006)<sup>(8)</sup>。このため、多くの農村では、農業と観光を組み合わせた多様な取り組みがみられ、国などの政策面での支援も充実しつつある (立川 2005)<sup>(9)</sup>。

このように農業や農村をめぐる人々や社会の価値観 (農村観) は変化しており、一昔前までは顧みられることのなかった農村の景観や生活様式、あるいは農村空間そのものが観光対象として都市住民に安らぎやレクリエーションの機会を提供している。このため、農村は生産空間としての役割に加え、消費空間として農業振興や農村の活性化にとって大きな役割を果たすこととなっている (林 2007)<sup>(10)</sup>。このことは、農家が都市住民を対象に、グリーンツーリズムや農村観光といった形で農家民宿や農業体験活動に従事することや、市民農園や観光農園、農産物直売所を通じて都市住民との関わり合いを強めていることなどからもうかがえる。

### 3. 中学校社会科地理教科書にみる「農業」・「農村」の取り扱い

前章で整理した農村観の転換を受け、本稿では、東京書籍の社会科教科書「新編 新しい社会地理 (2006年発行)」(以下、教科書①)と日本文教出版の「中学生の社会科 地理 世界と日本の国土 (2002年発行)」(以下、教科書②)において取り扱われている農業および農村に関する学習内容を検討する。

教科書①は、215ページの構成で、このうち26ページが農業・農村に関連した学習内容によって占められている (表1)。内容構成は、国内・国外を問わず、自然的条件や農業の地域差を論じる傾向が強く、農業生産を重視した取り扱いとなっている。このため、農村を取り上げた内容は非常に少なく、第3編第1章第3節の「世界と日本の人口」において「過疎の問題とその取り組み」(176～177ページ)があるのみである。この項目では、過疎の問題と町おこし・村おこしについての簡単な説明と具体例として高知県梼原町の「棚田」が取り上げられている。この点は、生産面のみに偏った内容ではなく、消費面 (観光開発や地域振興) との関わりからも農業・農村の問題を考えさせる内容となっている。しかし、棚田のオーナー制度や山村留学などを用語や写真として掲載しているものの、都市住民の関心や欲求がなぜ農村に向けられるようになったのか、その背景については十分な説明がなく、観光やレクリエーション需要の高まりと農村の観光化 (町・村おこし) がつながるような構成にはなっていない。この点は、北口・広田 (1999) と北口・広田 (2000) による小学校の社会科教科書における農業・農村の取り扱い方の分析と同様の結果を示している<sup>(11)</sup>。

すなわち、農家や農村よりも農業 (生産) に関する話題が中心であること、環境問題や農村活性化、農村でのレクリエーションといった食料生産以外の機能についても取り入れられているが、教科書に十分に反映されていないとい

表1 中学校の社会科地理的分野の教科書①において取り上げられている「農業」・「農村」に関する学習内容

章および節の表題	学習項目	ページ
<b>第2編 地域の規模に応じた調査</b>		
<b>第1章 身近な地域の調査</b>		
4. いろいろな方法で調べよう	聞き取り調査と調査票(調査対象:農家)	59～60
<b>第2章 都道府県の調査</b>		
<b>第1節 さまざまな地域からなる岩手県</b>		
2. 地域の自然を生かした生活	自然を生かした農業	68
	気候を生かした畜産業	69
4. これからの岩手県を考える	これからの岩手県を考えよう	73
自由研究:多面的に兵庫県を調べる	多彩な兵庫県の農業	74
<b>第3節 世界と日本を結ぶ東京都</b>		
3. 他地域と密接に結びつく東京都	東京都の産業の特色	91
<b>第3章 世界の国々の調査</b>		
<b>第1節 多様なすがたをもつアメリカ</b>		
2. 大規模な農業	合理的な農業生産	102～103
	輸出される農産物	103
<b>第2節 世界一の人口をもつ中国</b>		
2. 豊かで多様な農業生産	地域によって異なる農業と主食	112
	農業と気候を結びつけてみよう	112～113
	地域の農産物に合わせた食生活	113
<b>第3節 世界との結びつきを強めるフランス</b>		
3. ヨーロッパのなかのフランス	フランスの産業	124～125
自由研究:産業と文化のつながりからオーストラリアを調べる	オーストラリアの農業	128
自由研究:イギリスとの結びつきからガーナを調べる	ガーナの土地の利用と鉱工業を調べる	130
	カカオ輸出の歴史	130
<b>第3編 世界から見た日本のすがた</b>		
<b>第1章 さまざまな面から見た日本</b>		
<b>第2節 世界と日本の生活と文化</b>		
5. 独自の生活文化をもつ沖縄	亜熱帯の自然と産業	163
<b>第3節 世界と日本の人口</b>		
5. 過疎の問題とその取り組み	過疎の問題と町おこし・村おこし	176
	町おこしに取り組む梶原町	177
<b>第4節 世界と日本の資源と産業</b>		
3. 世界的に見た産業	世界的に見た農林水産業	184～185
4. 日本の農業	日本の農業の特色	186～187
	農産物の自由化とこれからの農業	187
5. 日本の林業・漁業	世界から見た日本の林業	188
7. 日本の商業・サービス業	温泉リゾート湯布院のなやみ	193
発展:地域区分してとらえる栄養摂取と穀物貿易	地域区分してみた世界の供給栄養量	194
	食料生産とアフリカ	194～195
	地域区分してみた世界の穀物貿易	195
	食料流通とアフリカ	195

[東京書籍発行(2006年)の『新しい社会 地理』をもとに筆者作成]

う点である。

また、日本の農業の特色を説明する第3編第1章第4節「日本の農業」(186～187ページ)においては、アメリカ合衆国の企業的な農業との対比が強調されすぎともいえる。すなわち冒頭の文章(186ページ1～6行目)では、「アメリカの大規模で企業的な農業と比べると、日本の農業は規模の小さい自作農が多いことが特徴です。また、品種改良や肥料の使用、機械化などにより、単位面積あたりの収穫量が多いことも特色です。しかし生産費も高いため、輸入農産物と比べ国産農産物の価格は高くなっています。」となっている。これは、単位面積当たりの収量や栽培上の工夫といった日本の農業の評価されるべき内容が後半部で補足される形になっており、より一層、国際競争力のない産業であるとの印象を与えかねない記述になっている。もちろん、日本の農業の工夫や優位性についても、「高い品質や安全性を大切にしてお互いに対抗しようと努力している」として、次ページ(187ページ)に確認できることから、必ずしも悲観的な側面のみではないことは付け加えられているが、有機栽培や産地直送グループの存在が明示されるのみで、具体的な取り組みやその主体(人間)がはっきりしない点は、改善すべき点である。他国と比較し、その特徴を明らかにすることは、地理学習にとって重要な視点であるが、充実した学習内容を提供するためには、より動的な記述や取り扱いが求められよう。

次に、教科書②について検討する。教科書②は、229ページの構成で、このうち25ページが農業・農村に関連した学習内容によって占められている(表2)。全部で7章構成になっており、第3章の身近な地域調べから、第4章(都道府県調べ)、第5章(世界の国々調べ)、第6章(さまざまな日本の特色)といった各章において農業に関する地域差や地域における特徴が取り上げられている。社会科教科書①に比べ、より地域に関する記述や因果関係を詳細に論じ

る傾向がみられる。また、挿絵に生徒の意見や発問がより多く掲載され、それが生徒に「地理的な見方・考え方」を指し示すような役割を果たしている。このことは、平成10年度版学習指導要領において進められた「学び方を学ぶ」学習への配慮といえる。

農業および農村に関する記述は、農業生産に関するものが、22ページと全体の88%を占める。このため、農村を取り上げた箇所は、ケニアの都市部と農村部における生活様式の差異に関する部分(161ページ)と過疎化を取り上げた部分(182～183ページ)のみである。この点は教科書①とはほぼ同様の結果を示している。しかし、この項目では、農村部からの人口流出とそれに伴う生産活動および防災、教育、医療面での問題点が示されるのみで、交流人口の増加や地域振興といった取り組みについては言及されていない。

以上の点を踏まえると、教科書①および②とも、農村への観光需要の高まりや農村空間が観光地として消費の対象になることを付け加えることが不可欠である。こうした内容を取り入れることで、観光資源として農村が都市住民を惹き付ける魅力ある空間となっていることが理解できるからである。また、環境保全型農業や農産物のブランド化といった話題にも触れて日本の農業の将来を展望することも重要である。

このように両教科書とも農業生産に関する記述については、十分に紙面を割いているものの、日本の農業にみられる優位性や可能性については、もう少し具体的に言及する必要があるといえる。また、農村に関しては、過疎との関わりや都市と農村の生活様式に関して取り上げられているものの、その多面的な機能についてはほとんど取り扱われていなかった。このため、第2章で整理したような、生産面以外の機能を評価するような内容構成を工夫する必要があるといえる。

ただ、教科書で取り扱う内容は、学習指導要領

表2 中学校の社会科地理的分野の教科書②において取り上げられている「農業」・「農村」に関する学習内容

章および節の表題	学習項目	ページ
<b>第3章 身近な地域調べ</b>		
2. わたしたちの地域調べー茨城県ひたちなか市を例にー		
土地利用の調査	①「土地利用」班の調査と発表	88～91
農産物の調査	④「干しイモ」班の調査と発表	102～105
<b>第4章 都道府県調べ</b>		
1. わたしたちの県		
県の農業を調べる	さかんな農業	112～113
県学習のまとめ	県の学習をまとめる	118～119
2. 大都市・東京都		
産業から見た東京	地の利を生かした近郊農業	125
3. 地方中心都市のある福岡県		
産業から見た福岡県	福岡県の産業	130
<b>第5章 世界の国々調べ</b>		
2. アメリカ合衆国		
農業から見たアメリカ	アメリカの穀倉	150
	多様な農業地域	151
民族の構成から見たアメリカ	多民族国家	157
3. ケニア共和国		
生活から見たケニア	都市と農村の生活	161
産業から見たケニア	茶とコーヒー	162
	野生生物の宝庫	163
<b>第6章 さまざまな日本の特色</b>		
2. 人口から見た日本の特色		
日本の人口構成	産業別人口構成	181
過疎化	農村部からの人口流出	182
	過疎地域での高齢化	183
3. 資源・産業から見た日本の特色		
日本の産業	日本のその他の産業	189
せまい国土の利用	耕地の高度利用	190

[日本文教出版発行(2002年)の『中学生の社会科 地理 世界と日本の国土』をもとに筆者作成]

のなかの各単元の学習と目標に依拠しており、先ほど指摘したような内容を、同一箇所（ページ）に挿入することが必ずしも適切とはいえない。例えば、表3に示した現行の学習指導要領のなかの内容(3)「世界と比べて見た日本」のなかでは、過疎の問題は「(イ) 人口から見た日本の地域的特色」において取り上げられるべき学習内容である。このため、過疎問題への解決策の一つの方法とみられる都市・農村交流や観光振興策などは、(イ)の単元に加えてしまえば、目的との齟齬が生じてしまう。すなわち、ここ

では、世界からみた日本の人口の地域的特色と日本国内をみたときの国内の人口の地域差を捉えるために人口の過疎と過密の問題を取り上げているからである。

そこで、ポスト生産主義的な内容を加味し、農村の抱える問題とその打開策として観光的な要素を取り入れた農業・農村のあり方を学習させるには、「(ウ) 資源や産業から見た日本の地域的特色」もしくは「(エ) 生活・文化から見た日本の地域的特色」のなかに位置づけて、都市住民の視点から農村を捉えることが現実的とい

表3 平成10年度版中学校学習指導要領社会科(地理的分野)における「世界と比べて見た日本」の内容構成

＜世界と比べて見た日本＞	
<b>ア 様々な面からとらえた日本</b>	
世界的視野から見た日本の地域的特色と日本全体の視野から見た国内の諸地域的特色を追究し、我が国の国土の特色を様々な面から大観させるとともに、地域の規模に応じて、また、地域間を比較し関連付けて、地域的特色を明らかにする視点や方法を身に付けさせる。	
(ア)自然環境から見た日本の地域的特色	
世界的視野から見て、日本は環太平洋造山帯に属し大地の動きが活発であること、温帯の島国、山国で降水量が多く、緑におおわれた国であること、自然災害が発生しやすく防災対策が大切であることといった特色を理解させるとともに、国内では地形、気候などにおいて地域差がみられることを大観させる。	
(イ)人口から見た日本の地域的特色	
世界的視野から見て、日本は人口が多く、また、人口密度が高く、平均寿命が長い国であること、少子化、高齢化に伴う課題を抱えていることといった特色を理解させるとともに、国内では平野部に多くの人口が集中し、過密・過疎地域がみられることを大観させる。	
(ウ)資源や産業から見た日本の地域的特色	
世界的視野から見て、日本はエネルギー資源や鉱物資源に恵まれていない国であること、土地が高度に利用されていること、産業の盛んな国であることといった特色を理解させるとともに、国内では地域の環境条件を生かした多様な産業地域がみられること、環境やエネルギーに関する課題などを抱えていることを大観させる。	
(エ)生活・文化から見た日本の地域的特色	
世界的視野から見て、日本においては比較的ものの豊かな中で人々が暮らしていること、また、近代化や国際化の進展などにより伝統的な生活・文化は変容していること、外国から入ってきた生活・文化は日本の環境条件に対応させて取り入れられてきたことといった特色を理解させるとともに、国内では生活・文化の地域による差異が次第になくなりつつあるが、一方で各地に特色ある生活・文化がみられることを大観させる。	
(オ)地域間の結び付きから見た日本の地域的特色	
世界的視野から見て、日本は国際間の交通・通信網の整備が進んでいること、世界の各地と強く結び付いていること、結び付きの深さや内容は相手の国や地域によって特色がみられることを理解させるとともに、国内でも交通・通信網の整備が進んでいること、各地の時間的な距離や位置の関係が大きく変化しつつあること、人や物資の移動には地域的特色がみられること、各地域の特色は他地域との結び付きの影響を受けながら変化していることを大観させる。	
<b>イ 様々な特色を関連付けて見た日本</b>	
アの各項目で学習した成果を相互に関連付け、世界的視野から見た日本の地域的特色、日本全体の視野から見た諸地域の特色を大観させる。	

(平成10年度版 中学校学習指導要領(社会)により作成)

える。そこで次章では、これらの課題の克服を目指した社会科地理的分野の授業を構想する。

#### 4. 社会科地理的分野における効果的な農業・農村学習の提案

これまでみてきた農業・農村に関わる人々や社会のまなざしの変容と前章の教科書分析から生産面にのみ偏らない農業・農村のもつ多様な役割を示す授業内容を構成することが妥当であるとの結論に達した。そこで、以下では、上述の課題に対応した農業・農村に関する授業を提案する(表4)。

ここで提示する内容は、農業と観光業の連携による地域活性化についての事例学習である。具体的には、大都市圏から離れた青森県南部町を取り上げる。この学習を通じ、農業・農村の抱える問題とそれに対する農村観光の取り組み、

人々の関心や興味が農村に向かってきた背景を理解させる。さらに、こうした内容を取り扱うことで、農業・農村の可能性を展望していく上での意見や企画を学習者に発案させ、社会をよりよくするための「市民」としての自覚を促したい。

授業は、3時間程度の配当で行われることを想定する。単元名は「農村観光と地域振興を考える」とし、第1時は、「農業・農村の抱える問題と対策」、第2時は「農村観光事業の展開と観光需要」、第3時は、「自分たちにできること」の3つの小単元を設定する。

まず、第1時では、日本の農業の現状および農村の抱える問題について既習の内容を確認する。まず、これまでの学習内容から、都市化の進展と兼業・離農化が進み、農業の担い手が不足していること、過疎化の問題などを想起させ

表4 「農村観光と地域振興を考える」の指導計画(全3時間)

単元目標	・農業生産以外の要素を活用することが農業・農村の発展を考える上で重要となっていることを理解する。 ・農業・農村の抱える問題とその解決のためにどのような対応がなされているのか理解する。 ・上記の2点を踏まえ、自分たちにはどのような貢献ができるのか考えを深める。	
第1時 農業・農村の抱える問題と対応		
	学習活動	指導上の留意点
導入	日本の農業の現状・農村の抱える問題を既習の内容から確認する。	都市化の進展と兼業・離農化が進み、農業の担い手が不足していること、過疎化の問題などを想起させる。
展開	都市住民との交流が地域振興にとって重要なことを整理する。	農業の衰退と農村問題の因果関係、活性化のために都市住民を誘引する活動が全国各地で展開していることを意識させる。
まとめ	農家個々の対応から、行政や農協との連携や法人、NPOを組織するような多様な活動が各地にあることを理解する。	大都市との近接性や地域の既存の産業や知名度など、それぞれの地域条件によって取り組みにも大きな差異が生じることに留意する。
第2時 農村観光事業の展開と観光需要		
	学習活動	指導上の留意点
導入	事例とする地域(青森県南部町)の地理的な特徴を理解する。	プリントやスライド写真などを用いて視覚的に説明する。 聞き取り調査の際の農家や行政の担当者の言説や発言を示し、直接、見聞かしていない生徒にも実感をもたせるようにする。
展開①	青森県南部町の農村観光事業の特徴と発展過程を理解する。	
	特徴①:特産のサクランボを中心にした地域振興策が行政と農家、地域住民を中心に1986年より実施 特徴②:観光農園や農家直売所での農産物の直接販売に加え、ファームステイや農業体験修学旅行にも対応 特徴③:農村での生活体験そのものを観光資源とする滞在型の農村観光が自治体と農家が連携することで実現	
展開②	農村観光事業の発展と提供メニューの拡充の背景を考える	既習の内容である兼業・離農の問題や農に触れる機会の減少したこととの関わりから観光需要の高まりについて考えさせる。
まとめ	農村への観光需要の生まれるしくみを考え、発表する。	農業や農村への都市住民の関心を高めていることや都市の生活にはない「非日常性」が農村の魅力を高め、観光資源として都市住民を惹き付けてきたことが学習者から提起されるように発問や補助資料などを工夫する。
第3時 自分たちができること		
	学習活動	指導上の留意点
導入	これまでの学習を踏まえて、自分たちができることは何かを考える。	現在(中学生)では、できることが限られていることを理解させる。
展開	将来も含めてどんなことができるかを考える。	それにより、時間の経過が自分の役割を変化させることを認識させ、未来志向の見方や考え方をもちこたせるように留意する。
まとめ	農村観光による地域振興の可能性を考える。	農村の多様な資源を活用し、それによって都市住民を誘引することの重要性とともに、限界や問題があることを提示する。それにより、現時点での取り組みが万能ではないこと、解決策の一例に過ぎないということを理解させる。

る。そして、これらの現状を打開するために、都市住民との交流が地域の振興にとって重要なものとなりつつあることを整理する。なお、本時では、農業の衰退と農村問題の因果関係、活性化のために都市住民を誘引する活動が全国各地で展開していることを意識させる。

そして、第2時において、具体的な事例地域として「青森県南部町にみられる農村観光事業」を取り上げる。この地域では、特産のサクラン

ボを中心にした地域振興策が行政と農家、地域住民を中心に1986年より行われており、観光農園や農家直売所が農産物の直接取引を促し、農家の営農意欲の向上に貢献するとともに、積極的な農家はファームステイや農業体験修学旅行にも力を注いでいることを写真や資料をもとに提示し説明する(写真1)。

さらに、農村での生活体験そのものを観光資源とする滞在型の農村観光事業が自治体と農家が



写真1 青森県南部町において農作業を体験する神奈川県内の修学旅行生（中学生）  
筆者撮影（2004年）

連携することで行われていることをプリントやスライド写真などから説明する。そして、こうした多角的な活動へと町の観光事業や農家の経営が拡充できた背景を学習者に考えさせる。ここでは、既習の内容である兼業・離農の問題や農に触れる機会の減少したこととの関わりから観光需要の高まりを考え、農業や農村への都市住民の関心を高めていることや都市の生活にはない「非日常性」が農村の魅力を高め、観光資源として都市住民を惹き付けてきたことに学習者が気付くように発問や補助資料を工夫する必要がある。また、受け入れる農家にとっても、自分たちの住む地域の再発見や郷土への愛着といった地域アイデンティティの育成が図られていることも補足する。

そして、第3時では、農業・農村の問題と近年の取り組みの一部を概観したなかで、自分たちが貢献できることは何かを考え、発表する時間を設ける。この時に注目させることは、単に今できることを考えさせるのではなく、自分のこれからの人生のなかで、例えば高校生になったらできること、大人になったらできることは何かといった、自分の成長と関連させて、できることは何かを考えさせることである。それにより、変化する社会のなかで自分の役割も変化し、それに伴って、その時に自分にできることを模索する未来志向の見方や考え方をもつための訓練となるからである。

また、ここで学習したことは、農村のもつ機能のうちの最も可視的な部分であり、観光振興による農業や農村の活性化を目指した1つの例であることを付け加える必要がある。農村の有する機能は多様であり、それぞれの地域の特性に合わせて、発展の方向性は異なるということを確認させることも必要である。

さらに、これらの取り組みは、農村の活性化あるいは個々の農家や住民にとって利益をもたらすが、農村のもつ食料生産機能や低下する食料自給率の問題の解決とは、異なる次元のものであり、混同させない配慮も求められよう。

学習のプロセスに関しては、価値判断や意思決定といった段階までを念頭におき、参加や行動といった部分には十分に踏み込んでいない点は課題である。しかし、将来的に自分に何ができるかという部分を意図的に考察させることで、生徒が自分にできることを具体的に実践する機会を将来的にもてば、それは参加・行動といった段階にまで学習を発展させたことと同義ともいえる。

加えて、ここで事例として取り上げた青森県南部町のように小学校・中学校・高等学校の農業体験修学旅行を受け入れる自治体も近年は多くなっている。このため、中学1～2年生で学習した地域に中学3年生になったときに訪問し、実際に農業体験を行うといったことも学習者に直接、事例地域の取り組みや農業者の声を届ける上で重要な体験といえる。こうした農業体験学習を総合的な学習の時間や修学旅行を利用して教科の学習と結びつけることは、知識と行為を統一的に学習する重要な機会である（井門2002；長澤2006）<sup>22</sup>。また、それにより、学習者にリアルに「農」を意識させる学習を提供することが可能になるのである。

## 5. おわりに

本稿は、中学校の社会科地理的分野において農業および農村をどのように取り扱うことが効

果的であるか、一例を示すことを目的とした。そのため、現在の農村研究において農村というものがいかなる視点から捉えられているのかを整理し、現行の教科書の記述内容と比較し、ポスト生産主義の視点を加味した授業案を構想した。

これまでも、地理教育のなかで取り扱う内容や視点について、時代の変化とともに、求められる内容は変化してきた<sup>(3)</sup>。また、新学習指導要領（平成20年度版）の中学校社会科地理的分野では、「学び方を学ぶ」方法知中心から地誌学習を重視する内容知中心へと転換しているが、本稿で示したような農村観は、内容を構成する上での視点を提供するものであるため、内容と方

法のどちらを重視したカリキュラムにおいても十分に意図を反映できるものといえる。

本稿は、農業や農村を事例に、こうした問題をどのように考え、教えていくことが現代において重要であるのか、その1つの方向性を示したに過ぎないが、他の産業や事象の学習を考える際にも同様のことがいえる。すなわち、各単元で取り上げられている内容の現代的な取り扱い方法の妥当性<sup>(4)</sup>や、学習者の置かれた環境（現実）と照らし合わせた上で、地理学習の内容が編成される必要があるからである。こうした学習内容の構成について議論を積み重ねていくことが、地理教育の質を向上させ、その有用性を社会に示すことにもつながるといえよう。

#### 註

- (1) 須藤由子（1996）：野外活動を活用した農業学習—さくらんぼの里，山形県寒河江市を訪ねて—。地理教育，25，96-103.
- (2) 篠原重則（1992）：社会科地理学習に対する好嫌傾向の形成機構。新地理，39（4），20-33.
- (3) 時代に即した課題を取り扱うという観点からは，山鹿は1977年の著作において，高度経済成長を経て，都市的な生活様式が浸透し，その差が少なくなった当時の状況に対し，都市と農村という二項対立関係から捉えるのではなく，都市と農村を連続体として一元的にみる地理学習の必要性を指摘している。山鹿誠次（1977）：地理教育における都市と村落。山鹿誠次著『地理と教育』大明堂，34-38.
- (4) クラウト，H.D. 著，石原 潤・溝口常俊・北村修二・岡橋秀典・高木彰彦訳（1983）：『農村地理学』大明堂。Clout, H.D.（1972）：Rural Geography: an introductory survey. Oxford: Pergamon Press.
- (5) Hoggart, K.（1990）：Let's do away with rural. *Journal of Rural Studies*, 6, 245-257. 高橋

誠（1998）：空間としての「農村」から農村空間の社会的表象—農村性の社会的構築に関するノート(1)—。情報文化研究，7，97-117. 高橋 誠（1999）：ポスト生産主義，農村空間の商品化，農村計画—農村性の社会的構築に関するノート(2)—。情報文化研究，9，79-97. 高橋 誠・中川秀一（2002）：人々のもつ「農村像」の特徴。農村計画学会誌，21，143-152.

- (6) Ilbery, B.W. and Bowler, I.（1998）：From Agricultural Productivism to Post-Productivism. in *The Geography of Rural Change*, ed. Ilbery, B., 57-84, Harlow: Pearson.
- (7) 「農業」や「農村」のもつ教育効果や教育価値については，多くの研究分野において研究の蓄積がみられる。大江靖雄（2004）：農業の教育機能の発揮とその課題—酪農教育ファームを事例として—。千葉大学園芸学部学術報告，58，17-27. 佐藤真弓（2006）：教育課程として行われる農業・農村体験の教育的効果についての分析—東京都武蔵野市セカンドスクールを事例に—。農村生活研究，50（2），28-35. 大塚清恵（2006）：グリーン・ツーリズムの教育的価値—「農」が

- ニート青年を甦らせる一. 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 57, 85-102.
- (8) Hall, C.M. and Page, S.J.(2006): *The Geography of Tourism And Recreation: Environment, Place and Space Third edition*. London: Routledge.
- (9) 立川雅司 (2005): ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容. 日本村落研究学会編『年報 村落社会研究 第46集 消費される農村—「ポスト生産主義下」の新たな農村問題』農山漁村文化協会, 7-40.
- (10) 林 琢也 (2007): 青森県南部町名川地域における観光農業の発展要因—地域リーダーの役割に注目して—. 地理学評論, 80, 635-659.
- (11) 北口まゆ子・広田純一 (1999): 教科書に見る農業・農村の位置づけの変化—小学校社会科を対象に, 30年前と現在—. 農村計画論文集, 1, 199-204. 北口まゆ子・広田純一 (2000): 小学校社会科教科書における農業・農村の取り上げ方—戦後から現在まで—. 農村計画論文集, 2, 187-192.
- (12) 井門正美 (2002): 地理教育における体験的学習の活用方法—知識と行為の統一的学習を求めて—. 秋田地理, 22, 1-7. 長澤周一 (2006): 社会科における農業体験学習の重要性. 岐阜聖徳学園大学 教育学部 教育実践科学研究センター紀要, 6, 13-34.
- (13) 地理における「農業」や「農村」の取り扱いに関しては, 前掲(1)および, 撰梅 (1983), 小林 (1999), 宮地 (2006) などにおいて, その取り扱うべき内容や視点・方法について指摘されている。撰梅正人 (1983): 農牧業学習への「土壌」の視点の導入. 地理, 2(5), 130-138. 小林正人 (1999): 農業の見方・考え方. 井上征造・相澤善雄・戸井田克己編『新しい地理授業のすすめ方 見方・考え方を育てる』古今書院, 94-103. 宮地忠幸 (2006): 農牧業の学習. 日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』帝国書院, p75.
- (14) 高等学校地理教科書におけるインド農業の記述を分析した荒木 (2008) においても, 漫然と従前の知識を伝えるだけでなく, どのような趣旨のもとでそれを教えようとしているのか, 今求められている趣旨は何かを検討する必要性が指摘されている。荒木一視 (2008): 高等学校地理教科書におけるインド農業の記述—デカン高原と綿花栽培地域を中心に—. 地理科学, 63, 94-110.